



| | |
|--------------|---------------------------------------------------------------------------|
| Title | 大学での知的トレーニング : アタマがナマっている人へのメッセージ |
| Author(s) | 楠木, 建 |
| Citation | 一橋論叢, 113(4): 399-419 |
| Issue Date | 1995-04-01 |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| Text Version | publisher |
| URL | http://doi.org/10.15057/12231 |
| Right | |

大学での知的トレーニング

——アタマがナマっている人へのメッセージ——

楠 木 建

はじめに

新入学のフレッシュマンはもちろん、多くの学生が多少なりともフレッシュな気持ちで新学期を迎えたことだろう。クラブ活動に打ち込もうとか、新しいバイトを始めようとか、それぞれの人が新学期のプランをもって来ると思う。ところで、みんなのプランの中に勉強は入っていますか。

一年生のうち多くの人はそれなりに大学での勉強に夢と期待を寄せているだろう。しかし、いったい大学で勉強するというのがいったいどういうことなのか、なんとなく雲をつかむような気持ちでいる人が多いのではないか。三年生や四年生であっても、今年こそ勉強しよう

と(多くの場合、過去の反省から)決意を固めている人が少なくないだろう。今年こそ仮進を解消するぞ、と情けないというか控えめな決意をもって勉強に取り組み始めた人もいるかもしれない。「仮進」の意味がわからない一年生は小平のキャンパスでどことなく老けた感じのする先輩に聞いてください。ただし、いやな顔をされるかもしれない。

とはいっても、ほとんどの上級生にとってこの手の決意は「いつか来た道」なのではないか。新しい学年が始まると「今年こそ」と思う。しかし、そうこうしているうちに夏休みになり、秋になってキャンパスに戻ってきた頃には勉強意欲がすっかり萎えてしまい、さらにクリスマスとお正月が追い打ちをかけるようになってきて、

これじゃいけないと思ってるうちに学年末試験になり、「お前この授業出てる?」「ノートならつてがあるよ」「じゃあスタドン一杯おごるから俺にも情報流してくれない?」「(スタドン)が意味不明な新人生は先輩に聞いてください。できたら体育会系の人がいいでしょう。喜んで教えてくれます」という会話がキャンパスのあちこちで飛び交い、ダメモトでばたばたと試験を受け、これじゃいけないということになり、また新学期になると「今年こそ」と思う。新人生は笑うかもしれないが、これを繰り返す人が少なくないというのが恐るべき現実なのである。

声を大にして言いたい。そんなことで大学生活が虚しくないのか。するとみんなは答えるかもしれない。「クラブ活動で充実しているし、バイトやデートで忙しいし、友達もたくさんできたし、そりゃあ勉強はいまいちかもしれないけれど、大学生活をエンジョイしてますよ。」

本当にそうだろうか。スポーツや遊びやバイトやデートだけをするのであれば、大学はそれほどよいところではないはずだ。スポーツだけに打ち込みたいのであればなんにも大学まで来て講義に出たり試験でひやひやするの

は割に合わないし、思いっきり遊びたいのであれば一橋大学のロケーションはあまりに田舎である。クラブや遊びがよくないと言っているのではない。それはそれでとても大切なことだ。ただし、勉強というか「知的活動」が生活のコアになっていなければ、四年間(あるいはそれ以上)のまとまった時間を他ならぬ「大学」で過ごすことの意味がわからなくなってしまふ。

この小論で強調したいことは、次の三つである。

(1) 大学では勉強は「知的トレーニング」であり、自分の軸足をおいた分野での明確な目的に向かったトレーニングとして取り組むべきである。

(2) 大学で知的トレーニングを積んだか積まないかははっきりとした差として現れる。

(3) そして、大学で経験できる知的トレーニングは実は他の場所ではなかなか受けることができないのであって、それだけに大学で過ごす時間は貴重である。

ここまで読んでなにか心に引っかかるものがあった人はぜひ以下の文章を読んでほしい。これはそういう人たちに対するメッセージである。⁽¹⁾何にも引っかかるものが

ないという人はもうどうしようもないので、とっとと遊びにでも何でも行ってください。きつと後悔するであろうことを予言しておく。

講義とデートとアルバイト

一橋大学の朝は八時三〇分スタートの限から始まる。

起きるのがつらい、できたら寝とばしたい、とベッドの中でぐずぐずしたあげく、そのまま本当に寝とばしてしまった経験はないだろうか。躊躇するぐらいならまだいい方かもしれない。一限は出席しないものと端から決めてしまっている人もいるだろう。ところがこれが彼女もしくは彼女とのデートだったらどうだろう。かりに八時半に国立で彼女との念願の初デートの待ち合わせがあったとしよう(そんなに朝っぱらからデートするというのはよっぽど訳ありのカップルだろうが、あくまでも仮定の話である)。こういうときは相当早くから自然と目が覚めるものだ。入念に歯を磨き、シャワーの一発も浴びてから服装をチェックし、それでもまだ時間が余るから鏡の前でにっこり笑顔の練習までしてしまい、準備万端整えていざ出陣という人が多いのではないだろうか。

なぜ講義とデートではこうも違うのだろうか。そんなのは当たり前だという人は、たとえばアルバイトだったらどうだろう。もちろんデートと違って起きるのはつらい。つらいけれども、ひとしきりぐずぐずしてから結局アルバイトへと出かけていく人がほとんどのはずだ。体育会系のハード・コアなクラブの朝練の場合はどうか。早起きがつらい上に待っているのは苦しい練習だ。考えるだけでもつらい一瞬である。講義に出るよりもよっぽどつらいだろう。しかし、今日はいいやとそのまま寝とばしてしまう人はいないだろう。

「講義がつまらないから」と言う人に聞きたい。それではなぜみんなは受験勉強にあれほど努力したのか。受験勉強は面白かったですか? マニアックな人は別に、受験勉強はもっとも面白くない作業のひとつだろう。僕は受験勉強のためにある英単語の参考書を使っていた。そのまえがきに著者のメッセージとして「夏の海でガール・フレンドと戯れるのも青春の姿であるが、一人黙々と部屋で勉強するのも貴重な青春の一コマである。どちらが有効な時間の使い方はいうまでもない」というような意味の文章があった。いうまでもなく、前者の

方が貴重である。高校生だった僕はこの人をおちよくったような文章に直面して怒りを禁じ得なかったものだ。

受験勉強はまさに忍耐の世界である。みんなはどちらかというときよく耐えた方だろう。必ずしも面白くないことでも忍耐強く取り組んできたはずの君たちなのに、なぜ講義は寝とばしてしまうのだろうか。

答は簡単である。「講義からは得るものがない」からだ。いや、より正確に言えば「講義からは得るものがない」という仮説を信じているから、である。そこに得るものとか目的が何もないければ、エネルギーや時間を投入しないというのはごく自然な話だ。逆にいえば、目的があるからこそ人は行動するのである。もっとも単純なケースがデートで、これは文句なしに楽しい。デートすることそれ自体が目的になっているからだ(場合によっては「手段」にすぎないこともあるが)。これと比べるとアルバイトは手段にすぎないけれども、そこには明確な目的がある。手に入るバイト代が頭をよぎるからこそ早起きもする。「試合に勝つ」という目的があるからこそ、苦しきくたつて悲しくつたつてコートの中では平気なのだ。「合格する」ためにつまらない受験勉強にも進んで

耐えるのだ。

ここで考えてみてほしい。大学で「講義に出る」とか「勉強する」ときに、みんなはそこにどういう目的をもっているのだろうか。あらためて問われてみると、「何となく面白そうだから」とか「強いていえば単位を取るため」という程度のことであって、とくに明確な目的はないという人が多いのではないか。目的が単位を取ることにすぎないのであれば、何も腰を据えて勉強する必要はない。近道や裏技や飛び道具がいくらでもある。

よく見てみると図書館にこもってばかりと勉強している人もいないことはない。しかし、そういう人に限って資格試験のための勉強をしていたりする。彼らがなぜ勉強しているかという点、司法試験とか公認会計士とかのはっきりとした目的があるからである。ただし、こういう勉強は必ずしも大学にいらなくてもできることであって、「大学の勉強」とはいえない。それが証拠にみんながお茶の水の予備校に通っている。聞いた話なので確認したわけではないけれども、商学部のある学年では女子学生の八〇%以上が公認会計士になるための予備校に夜な夜な出撃しているとのことだ。もし公認会計士にな

ることが究極の目的ならば、そういう人は時間的、経済的なコストをかけて大学まで来る必要は実質的ではない。別に予備校に通うことを批判するわけではないが、これはある意味で寂しい話である。それだけ学生が大学に勉強する場としての魅力を感じていないのかもしれない。われわれ教師も「大学で勉強する」ということの魅力を学生に与えられないでいるのかもしれない。

いずれにせよ、目的をもたずに勉強するのは少なくとも普通の人にとってはとても困難なことなのだ。もちろん、強い知的好奇心があって勉強することそれ自体が楽しくて仕方がないという人もいるだろう。これは勉強それ自体が目的となっているということであって、それに越したことはない。ただし、はじめから「勉強それ自体を目的としてせいぜいお励みなさい」と突き放してしまふのはあまりにも酷である。ある程度アタマがこなれてきてはじめてそういう境地に達するというのが普通だろう。

「知的トレーニング」ということ

大学での勉強からは得るものがない、少なくとも明確

な目的はない、単位さえ取れば講義に出ても出なくても勉強してもしなくても大した違いはない、と漫然と考えている人たちに告ぐ。それはとんでもない思い違いであり、損失である。大学でまともに勉強した人としらない人では明らかに差が出てくる。これは成績がいいとか悪いとか、そういうことをいっているのではない。日経新聞に書いてあることがよくわかるとかいう単純な知識の量のことをいっているのではない。もっと根本的な論理的思考力というかももの考え方のセンスとかそういう本質的な部分が決定的に違ってくるのだ。これをここでは「知的スキル」ということにしよう。大学で勉強するということには明確な目的がある。それは自分なりの「知的スキル」を育成し獲得するということである。

「知的スキル」とかいったりすると、君たちはすぐたかをくくって「そんな曖昧なものは何かわかんないよ、おっさん」と反応するかもしれない。たしかに知的スキルは公認会計士の資格とか、成績のAの数のように形あるものではない。しかしここで重要なことは、大学でまともに勉強したかしないか、その結果として知的スキルがあるかないかは雰囲気とか曖昧模糊とした違いなので

はなくて、あくまでも「一目でわかる違い」だということだ。よーいドンで一〇〇メートル競争をすれば誰が足が速いかは一目瞭然である。大学の友達同士で草野球をやるときに、体育会の野球部員が混じっていれば一発でわかる。経験者の方が目に見えて上手いのは当然だ(ただし例外もある。僕のゼミにはかつて野球部の主将と次の年の主将が同時に所属していたが、彼らはゼミ対抗ソフボール大会の時にしばしば期待を大きく裏切ってくれたものである)。

知的スキルもそれと同じである。ちょっと話をさせたりのを書かせたりすれば十分だ。社会に出てから見ると人が見ればほとんど残酷なまでに知的スキルがあるかないかはわかってしまうのである。これを読んでいる人は何らかの知的スキルを基盤にして長い人生を生きていくという人がほとんどなのだから、知的スキルがないということはとても悲しく恥ずかしいことだ。その悲しさはまったく泳げなくせに彼女を含む友達たちとプールに行かざるを得なくて、楽しく泳ぎ回っている友達を眺めながら彼女の冷たい視線を感じつつ一人プールサイドで寂しい微笑を浮かべてひなたぼっこをしている人の悲

しさに等しい。いや、もっと深刻な悲しさである。プールにいるときだけではなく、それが一生ついてまわるのだから。

大学での勉強は知的スキルを育成するという明確な目標に向けたトレーニングである。そして、その成果は困ったことに「目に見える」のである。「トレーニング」というとスポーツを連想するだろうが、ロジックはまさにスポーツと同じである。はっきりとした目標とプランをもって日常的にトレーニングし続けなければなかなか水泳は上手くならない。トレーニングがタイムを縮めるのだ。もちろんそのプロセスでは苦しいことやつらいこともたくさんあるだろう。しかしトレーニングの効果はそのうちはっきりと自覚できるようになる。それが目に見える成果をもたらすからである。目に見える成果のフイードバックがあるからこそ人はトレーニングする。大学での勉強という知的な活動でも同じことだ。知的スキルがあるかないかはみんなが社会で生きていく上で決定的に重要な問題である。そして、知的スキルはある朝起きたら突然つくものではないし、ほっておけば自然に発酵してくるものでもない。それは運動能力と同じで開発

可能 (developable) なものであり、個人が意図的・継続的に開発していくべきものだ。そのためには正しいトレーニングを積み重ねていくことがどうしても必要になる。

もちろんスポーツと同じように個人差はある。そもそも初期段階での知的スキルの水準にはばらつきがある。トレーニングの成果がすぐに現れる人もいれば、なかなか成果につながらない人もいる。そもそも、自然と知的スキルを身につけてしまうような天才肌の人もいるだろう。しかし、そういうケースはごくまれであるし、そういう人がいるからといってトレーニングをしなくてもいいということにはならない。もっといえば、俺はそもそも人と違ってアタマがいいと思っている(たいていは思いこみにすぎないのだが)人こそトレーニングという姿勢で大学での勉強に望むべきである。長嶋だって現役の頃は猛練習したものだ。

スキルの三階層

「知的スキル」とはそもそも何なのか。それがわからないことには話にならないので、知的スキルの中身につ

いての僕なりの理解を説明しておきたい。僕は経営学の組織論を専攻していて、その中に組織における人のキャリアとかスキルの関題を考えるという領域がある。そこでは知的活動にとって必要となるスキルの中身を次のように考えている。ポイントは二つである。

一般に知的スキルは次の三種類の異なる性格をもつスキルで構成されている。これが第1のポイントだ。

- ① テクニカル・スキル (technical skill)
- ② ヒューマン・スキル (human skill)
- ③ コンセプトチャル・スキル (conceptual skill)

はじめの「テクニカル・スキル」とは、特定の専門分野に固有の知識とかテクニクとか手続きに基づいて問題を解決する力のことを意味している。みんなが「専門能力を身につけたい」と漠然と思うときの「専門能力」はだいたいテクニカル・スキルを指していると思っよう。たとえば、会計のことがわかるとか、コンピュータが使えるとか、複雑な方程式が解けるとか、外科手術ができるとか、こういう能力がテクニカル・スキルである。たとえばクラブ活動で比較的大きな予算があって、それをうまく配分していかなければならないというとき、

会計という専門に根ざしたテクニカル・スキルをもって
いる人がいるのといわないのではずいぶん違う。そのク
ラブで試合中に大怪我をした人が出たとしよう。このと
きに必要とされるのは、なによりも救急治療の領域での
テクニカル・スキルをもってしている人(医者)だ。このよ
うに、組織や人がある種の問題に直面したとき、それを
解決するのに直接的に役立つ特定の専門領域での能力が
テクニカル・スキルである。テクニカル・スキルはその
具体的な中身についての標準化された理解が社会に定着
していて、共通の言語が発達しているのが普通だ。とい
うことは、「わたしのテクニカル・スキルはこれこれだ
す」と簡潔に表現できるし、そういわれた方も「ああ、
君のできることはあれあれなのね」と容易に理解できる
ということだ。テクニカル・スキルとはそういうもので
ある。

「ヒューマン・スキル」とは、人と人とがさまざまな
やりとりをするときに必要となるスキルであり、広い意
味での「対人関係能力」を意味している。これは単純に
「口が上手い」とか「人づきあいがいい」ということで
はない。ヒューマン・スキルは「人にものを伝える能

力」とか「説得力」といいかえてもいい。たとえば、主
旨としては同じようなことをいっているのに、なぜか妙
に説得力があったり、話がすすいと自分の中に入って
くるというタイプの人がいるでしょう。筋道を立てて説
得的に話すのが上手いとか、人の意見に謙虚に耳を傾け
るとか、その理由はさまざまだろう。そういう知的な側
面での人間的な魅力の源泉となっているのがここでいう
ヒューマン・スキルだ。

最後に「コンセプトチャル・スキル」。こいつがなか
か難しいのだが、たとえばこういうスキルである。物事
の部分ではなくて全体をみることができ力。全体を構
成する部分の間のつながりを理解し、それをあるパター
ンをもった全体へとまとめあげる力。そのなかで、何が
本質的に重要なのかをつかみ、優先順位をつけることが
できる力。そして「ようするにこれだ!」というコンセ
プトを創造する力である。「コンセプト」とは、われわ
れが興味をもってしている対象とか現象とか物事の本質を凝
縮した形でえぐり出した言葉である。こういうコンセプ
トが出てきたとき、それは組織や個人をつき動かす方向
性とかパワーとかビジョンを含んでいる。

もう少し具体的な例でいうと、今ここに経営不振に陥っている会社がある。その理由はさまざま、いろいろな問題がぐちゃぐちゃと入り組んだ形で山積している。

「何が問題なのか問題だ」という状況である。こういうときに、「われわれの進むべき道はこれだ!」という方向を明確に打ち出すということ、そして「なるほど、

そうだよな」とみんながうなずいて元気が出てくること、「おーし、それでいくか」と周囲の人々がつき動かされるところ、それがコンセプْتُブくりであり、そこで必要となる力がコンセプチャル・スキルである。

コンセプチャル・スキルは「問題の全体像を理解して、そこから本質的な問題を導き出す能力」といってもよい。テクニカル・スキルがあらかじめ設定されている特定の問題を解決する能力であるとすれば、コンセプチャル・スキルは解くべき問題を発見して設定する能力だ。これは切り口を見つける力とかものの考え方のセンスとかいうレベルの話なので、特定のハードな知識に立脚してはいるけれども、テクニカル・スキルと比較して一般性という汎用性が高い能力である。現実在即していえば、コンセプチャル・スキルを使って問題が立った後に、そ

れをさまざまな部分部分で解決していくのがテクニカル・スキルの担当である。社会の中にいる以上人間の活動は個人で完結するということはないので、ここではテクニカル・スキルだけではなくヒューマンなスキルも重要になる。三つのスキルそれぞれのイメージがわかりましたか？

さて、もう一つの重要なポイントは、人に知的スキルがあるという場合、三つのスキルは漠然と並置しないしは選択できるようなものではなくて、実は階層をなしているということだ。つまり、①テクニカル・スキルが最下層にあり、その上に②ヒューマン・スキルがのっかっていて、一番上に③コンセプチャル・スキルがあるという階層構造が知的スキルにはあるのである。スキルが階層をなしているということは、コンセプチャル・スキルが一番高級で上等であるということの意味している。それと同時に、テクニカル・スキルがあってはじめてヒューマン・スキルを獲得できるのであり、ヒューマン・スキルの上にはかコンセプチャル・スキルは育たない、ということをお忘れはならない。コンセプチャル・スキルは確かに一番重要で上等なのだけれども、何もないとこ

にいきなりコンセプチャル・スキルをつけようと思ってもそれは甘い考えである。テクニカル、ヒューマンという積み重ねの上にはじめてコンセプチャル・スキルが生まれるのだ。

だから「自分には何もないけれどもコンセプチャル・スキルだけは自信がある」という人がいたらそれは相当の変わり者である。あまり信用しない方がいい。「僕は特に何ができるわけはありませんがだれとでもうまくやっつけていきます」という人、こういう人はたしかに「いい人」かもしれないがしよせんそれだけで、「知的」スキルはゼロである。繰り返すが、ここでいう知的スキルとしてのヒューマン・スキルがある人というのは「ただのいい人」では決してない。「いい人なんだけどなあ、でもちょっとね」という人は、テクニカル・スキルの裏付けのない「ヒューマン・スキルもどき」の人であることが多い。「自分はこれしかできない。人とのやりとりも下手だし、大きなコンセプトもない」という人は一見狭量で暗そうだが、こういう人の方がまだ健全で筋がよい。なぜなら、この人はテクニカル・スキルを備えた人であり、それに立脚して上位のスキルを開発していく可

能性を秘めているからだ。

大学での勉強の究極の目的はコンセプチャル・スキルの育成にある。これは大学での勉強に限らず、およそあらゆる知的研鑽はコンセプチャル・スキルの獲得をめざしているといえる。繰り返し強調するが、しかし、特定のテクニカル・スキルがベースになればコンセプチャル・スキルを獲得することはまず不可能であると考えた方がいい。つまり、大学での勉強は、まずテクニカル・スキルのトレーニングからはじめて、だんだんとスキルの階層を上げていき、最終的にコンセプチャル・スキルの獲得に至るといふ流れをたどるわけだ。この順番をしつかりとアタマに入れてほしい。

まずはテクニカル・スキルから

ようするに、まずはテクニカル・スキルから取りかからないと話は始まらないのである。ここで大いに強調しておきたいのは、大学での勉強に専門とか専攻というのがある以上、それは程度の差こそあれ何らかのテクニカル・スキルを必ず含んでいるということだ。ようするに「自分のやることはこれだ」という専攻領域を決めれば、

それが何であっても特定のテクニカル・スキルを獲得できるのである。

このことはとても重要なことなのだが、残念ながら多くの人が誤解していると思う。テクニカル・スキルというと電子工学や医学、生化学、数学といったみんなの言葉でいう「理系」のほうがイメージしやすい。こういうことをやっている人には普通の人がなかなかできないような「これができます」というものがあるからだ。いわゆる「文系」であっても、法律や会計などはテクニカル・スキルっぽいかもしれない。しかし商学部の勉強を例に取れば、みんなにとってテクニカル・スキルの中身をイメージしやすい会計学はもちろん、金融やマーケティング、企業の経済学などすべての領域にはそれぞれに固有のテクニカル・スキルがある。僕の専門の組織論や戦略論にもきちっとトレーニングを積んだ人だけが使いこなせるいろいろな分析のフレームワークがある。それは数学を勉強した人だけが複雑な方程式を解けるのとまったく同じ意味での価値あるテクニカル・スキルである。テクニカル・スキルが重要だということについては文系も理系も関係ない。

ようするに文系と理系という二分法がよくないのだ。

ありがちな図式だと、理系の人はテクニカル・スキルに強く、文系はヒューマン・スキルを發揮して対人関係能力で勝負する、ということかもしれない。しかしちょっと待ってほしい。スキルの階層構造を考えれば、そういう「分業」が理系と文系の間にあるというのはちゃんちゃらおかしい話だ。テクニカル・スキルの支えのないヒューマン・スキルなどというものはあり得ない。あったとしてもそれでは知的パワーとしてはあまり尊敬されない。「あなたっていいひとね、さよなら」で一卷の終わりである。どんな知的活動だろうとテクニカル・スキルの獲得からはじまることには変わりがない。これがなければ理系だろうと文系だろうとものにならないと考えるべきだ。「あたしは文系だし、自分の専門とかもないし、一所懸命勉強しても別に就職とか関係ないし」とか考えている人は、月にかわってお仕置きである。よく反省してもらいたい。

スポーツでいえば、優秀な野球選手になるためには体力をつけたルールを理解したり正しいフォームを固めることがなによりもまずはじめに大切になる。それと

じて、テクニカル・スキルはすべての出発点であり、あの領域でまとまった知的スキルを構築するためにどうしても必要となる「言葉」とか「文法」のようなものだ。

それは意図的なトレーニングをしなければ獲得できないスキルである。逆にいえば、正しいトレーニングを根気よく続けていけばテクニカル・スキルは必ず身につく。

これがテクニカル・スキルのよいところだ。僕が知的「トレーニンング」という視点を強調するとき、直接的にその対象となるのはテクニカル・スキルである。トレーニングによってゼロからいきなりコンセプチャル・スキルを獲得することはとても難しい。昔からある「滝に打たれる」というのはもしかしたらいきなりコンセプチャル・スキルを獲得しようとする「トレーニンング」なのかもしれないけれども、それで本当にコンセプチャル・スキルがつくかどうかはよくわからないし、だいたい風邪をひいてしまう。あまり得策とはいえない。しかし、テクニカル・スキルのトレーニングから積み上げていけば、優れたコンセプチャル・スキルを獲得する可能性はぐっと高い。

テクニカル・スキルのトレーニングはそれなりに長く

厳しい道なのである。僕のゼミの学生を例に取れば、毎週かなりの量の英語の文献を読んで(英語で専門書や論文を読めるようになるというのむひとつのテクニカル・スキルではある)、基本的な概念や分析のフレームワークを勉強しなければならない。いろいろな授業に出るのももちろん重要なトレーニングの機会である。朝一限からで、自分のやっていることに関連する知識を学習しなければならぬ。「知識」とは単に「知っている」というレベルではなく、その原理や論理を本質的に理解するということである。

それだけではもちろん十分ではない。テクニカル・スキルは問題解決能力であるから、「理解する」だけでなくその知識を現実に応用するというか「使える」レベルまでもっていかなくては本当のスキルとはいえない。あらゆる勉強には常に「理論」と「実践」とか「基礎」と「応用」の二つの側面がある。これもよく誤解されるところだ。たとえば、「経済学は理論的で抽象的だよなー」、「でも経営学は実践的だよなー」、「だよなー」などと学生がよく話しているけれども、そんなことは決してない。経済学にも理論と実践があり経営学にも抽象と具体があ

る。どんな勉強でもそうだ。ただし、重要なことは理論の理解というベースのないところに実践的な問題解決能力は育たないということだ。

しかし知識は自然と使えるようになるのではない。「知る」と「使える」の間には実は天と地ほどの差があるので、知識の習得と並行して、知識を使う練習を相当インテンシブに積まなくてはならない。僕のゼミの例でいうと、さまざまなケース・スタディをこなしていくのがこの練習に当たる。それに加えて、将来自分で問題をたてて分析するときにも必要となるデータ収集と分析の方法論を勉強しなければならない。

こういったテクニカル・スキルのトレーニングを毎週重ねていくことがどれぐらいハードかという点、その質はちょっと違うけれども体育会のクラブと大体同じくらいハードと考えればよい。知的スキルのトレーニングはスポーツのトレーニングと同じ論理だということは前に言ったけれども、まさにゼミは「知の体育会」である。実際ゼミの学生にいわせると、クラブが終わってから夜の二時、三時まで勉強することが珍しくないという。だからテレビを見る時間はまずないという。大学でこんな

に勉強するとは思ってもみなかったという。ノイローゼ寸前だという。もう死にそうだという(ただしこれは教師である僕に対する自己申告なので、多少割り引いて考えた方がいいかもしれない。でも相当に勉強しているというのは本当である)。

軸足のあるトレーニング

なにも彼らはもともと勉強熱心だったというわけではない。ゼミに入った頃は、エー、まことに申し上げにくいのですが僕は知的活動とは二年間ご無沙汰しておりました、ドーモすいません、体だけは大事にしてください、という人がほとんどだった。脳味噌が豆腐のようにぐちゃぐちゃになっていたり人や、体育会のクラブのみに打ち込んできたため脳まで筋肉になってしまいましたという人が少なくない。ではなぜ彼らはいまハードに勉強しているのか。理由は簡単で、こういった勉強が特定の専門に根ざしたトレーニングになっているからである。彼らが目的意識に目覚め、勉強を目的もったトレーニングと受けとめているからである。

考えてもみてほしい。さあ勉強しなきゃ、ということ

で背中を押されるような気持ちでやみくもに講義にでて、出席をしたとか授業中寝なかつたとか良い成績がとれたという程度の自己満足が残るだけで、本当の意味での面白味や達成感を感じることはあまりないのでないか。勉強は自分自身でやるものなのさ、とクルールに悟りを開いてそれらしい本を読み始めても、苦痛なばかりで肝心の内容はエンジョイできずに終わってしまう。僕に言わせれば、これはなにも自分のやりたいことがないのに、ただ黙々と走り込みや筋トレをしているのに等しい。おもしろくないのが当たり前だし、途中で挫折しない方がおかしい。なぜハードなトレーニングができるかというと、野球がうまくなりたいたい、一〇〇メートル自由形のタイムを縮めたい、というような目的があるからだ。いいかえれば、そこに「野球」とか「水泳」という特定の種目があり、その分野で上達するためのテクニカル・スキルが見えているからだ。

ようするに軸足のないトレーニングはあり得ないのである。「幸せは歩いてこない、だから歩いていくんだよ」というのは至言であるけれども、水前寺清子はやや詰めが甘いといわざるを得ない。歩き出す前に、まずどこに

歩いていくのかを決めなくてはならないのが問題なのだ。「まずはテクニカル・スキルから」と僕が強調する理由もここにある。知的トレーニングはまず自分のやりたい「種目」、すなわち専門分野に軸足をおくことから始まるのだ。自分で軸足を定めてはじめて勉強に目的が生まれ、その成果を自ら体感することができるのである。これはまさにトレーニングであるから、はじめは多少苦痛であっても四の五の思い悩む必要はない。よいコーチについて黙々とやっていたらすぐに成果が現れる。テクニカル・スキルがついてきた自分に気づくはずだ。そうなればしめたものだ。授業に出るにしても、本を読むにしても、友達とディスカッションするにしても、知的に貪欲になってくる。そういうことが苦痛でなくなる。ようするに勉強が本当の意味で楽しくなってくるのである。これが「軸足を定める」ということの意義だ。

この軸足問題は大学の勉強と高校までの勉強との差でもある。高校の勉強は間違いなく大学での勉強の基礎となるものであり、大学での勉強に最低限必要な「言葉」を提供するものだ。だから一種のテクニカル・スキルのトレーニングであるとも考えられる。しかし高校までの

勉強には軸足がない。少なくとも軸足を固めて勉強するように設計されていない。これが大学の勉強との決定的な違いである。だから知的トレーニングとしてどうしても弱い面がある。一所懸命勉強するとしたら、大方の場合そこには「受験」という他人から与えられた目的があるだけである。これが現実にはニセの軸足として機能しているわけだが、受験に合格して大学に入ったら最後、ニセの軸足はとっばらわれてしまう。自分で軸足を決めなければそれから先は歩いていくことはできないのだ。悲しいことに、ニセの軸足を取り上げられた善男善女が右往左往しているのが小平キャンパスの現状である。

では、軸足はどうやって決めればいいのか。結論からいうと、それは結婚と同じようなもので、客観的な選択というよりは主観的や決意というか「思いこみ」に近い。慎重に結婚相手を選んでこの人が最高だと思ったとしても、事前にその人が結婚相手として最高かどうかは本当のところはわからない。結婚してみればじめてわかる。しかしだからといって一度に複数の人と結婚するわけにはそもそもいけないのだから、この人がベストなのかとか自分と本当に合っているのかなどとぐじぐじと心配し

たところで意味がないし、その必要もない。まじめに楽しく結婚生活に取り組んでいれば結果としてその人は最高の結婚相手になるのである。大学での勉強の軸足の決定もこれと似ている。素朴な思いこみでいいから、とりあえず自分で決めてみるしかない。自分の思いこみを信じてみるべきだ。そして一度決めたら全力でトレーニングを始めてみるべきだ。で、どうしても自分に向いてなかったりつまらなければ、ま、離婚すればいいでしょう。

高校生の時から何となく専門として勉強したいことイメージがあった人もいるだろう。たとえば経済学がやりたいとか、日本史がやりたいとか。しかしこういうのはあまりに素朴すぎるので、信用しない方がいいと思うというのは、こういうイメージは往々にして高校での勉強が与えてくれるカテゴリーに引きずられてしまっているからだ。むしろ大学に入ってからオープンな気持ちで自分の「思いこみの芽」を探していくべきである。

だから、軸足を見つけるといふ意味で小平での前期の二年間はとても大切な時間となる。現在の前期教育はどちらかという幅の広い教養を身につける時期として位置づけられている。もちろん幅の広い教養を身につける

ことも大切なことだ。しかしそれだけで終わってしまえば「幅の広い教養」は単なる拡散にしかすぎない。どこかに収斂していくポイントがあるからこそそれだけ幅もまた必要になるのである。単に義務として講義に出たり、単位が取れる程度に聞き流すのではないつまでたつても「思いこみの芽」は生まれぬ。大学教育から僕のいう意味での知的スキルを得ることは難しいだろう。いろいろな授業に出てみたり本を読んだりするときに、自分の結婚相手を決めるような真剣な気持ちでいることが大切だと思う。こういう姿勢でいれば、「これだよね」という軸足がそのうちかならず見えてくるはずだ。

僕もわずか八年前までは一橋大学の商学部生だった。まだ学生の心を失っていない(はずの)僕の経験は参考になるかもしれない。僕ももちろん例外でなく、大学に入った頃は勉強するということの意味がよくわからず、情性で授業に出たり出なかつたりしていた。ところが二年生の時に偶然に榊原先生という人(講義要項をめぐっても、先生はもういない。こう書くともまるで亡くなったようだが、榊原先生はロンドン大学に移っただけで、元氣である)の前期ゼミに入ったことから異変が起きた。

榊原先生とのやりとりはとても刺激的だった。こいつは臭いな、と思つたところに、伊丹先生という人(この人はまだ大学にいる。十分すぎるほど元氣である)と野中先生という人(このお方もおいでになります)の特殊講義が追い打ちをかけた。ワクワクするほど面白かったのである。「思いこみ」の芽が出てきた。三年生になった僕は榊原ゼミに参加し、この頃になると「思いこみ」は「確信」になっていた。それが結局今の仕事になってしまったのだから、人生どこでどういことが待ち受けているのかまったく油断のならない話である。

いづれにせよ、まだ軸足が定まっていない人は是非ともオープンな気持ちでいろいろな授業に出てみてくださ。もっといいのは教師と直接にやりとりすることだ。こういうことに興味があるんだけど、というようにことを相談したり、自分なりに感じた疑問を直接ぶつけてみるのが一番手っ取り早い。目星をつけて研究室に行けばきつと相談に乗ってくれるだろう(大学の先生は意外と人がいいので、けっこう喜んで相手をしてくれるはずだ)。直接研究室には乗り込みにくいというシャイな君には前期ゼミや特殊講義のような少人数のクラスに入っ

てみることをお勧めする。ようするに自分一人で部屋に閉じこもってうんうん唸っていても、なかなか自分の軸足は見えてこないということだ。

そして、コンセプトチャル・スキルへ

ここまでテクニカル・スキルのトレーニングの必要性を強調してきたけれども、それはあくまでもコンセプトチャル・スキルへ到達するためのステップとしての話である。大学での勉強が究極的にはコンセプトチャル・スキルの獲得をめざしているということはすでに話した。テクニカル・スキルのトレーニングはコンセプトチャル・スキルにつながるっているからこそ知的トレーニングとして意味があるのだ。もっといえば、それが知的トレーニングの場としての大学に固有の意義である。

「大学で勉強しなくてもいいさ」という人にその理由を聞いてみると、別の場所に代替的な勉強の場があるから、と考えている人が意外と多い。しかし、それは間違いである。大学には大学でしかできない貴重な勉強の機会がありすぎるほどある。というと、したり顔の大人が「まったく役に立たない、意味のないことを勉強できる

のは大学時代ぐらいだから、その意味で大学での勉強には意味があるのさ、ふふふ」などとわかったようなわからないようなことをつぶやいて遠い目をしたりする。僕はこういう素直でない考え方は好きではない。本当にまったく役に立たないようなことだったら、やらない方がいいに決まっている。少なくとも貴重な青春のまとまった時間と他のさまざまなコストをかけてまですることではない。

結論からいうと、コンセプトチャル・スキルをまともに射程においたトレーニングができる「場」は大学だけなのである。この点が大学での勉強に固有のいいところだ。もちろんコンセプトチャル・スキルの研鑽は大学時代のみならず、一生続けるべきものである。逆にいえば、知的スキルに優れた人ほど社会生活の中でさまざまな経験からコンセプトチャル・スキルを磨いていけるものだ。しかしこれは個人的にやっているということであって、研鑽の「場」があるわけではない。

最近大学と並行していく人も多い専門学校はテクニカル・スキルをつける場である。しかし、そこで終わりで、テクニカル・スキルのトレーニングで閉じており、

コンセプトチャル・スキルへとはつながっていかないのだ。大学ではむしろ勉強しない方がいい、企業に入ってから十分トレーニングを受けることができるのだから、という世をはかなんだ人も依然として少なくない。確かに企業でも勉強はできる。企業には各種の研修プログラムやオン・ザ・ジョブ・トレーニング(OJT)の仕組みが整備されている。しかしそこで学べる知的スキルは圧倒的にテクニカル・スキルというか文字どおりの「実務」に偏っているし、せいぜいヒューマン・スキルどまりだ。だいたい企業での勉強は腰を落ちつけてやるというにはあまりにもばたばたしている。企業は企業なのだから、ひとりひとりにじっくりと一般的な思考のセンスを磨かせてくれるほどお人好しではない。それではコンセプトチャル・スキルにつながる知的トレーニングを受けたいと思う企業人はどうするのか。企業を一時的に離れて大学院教育を受けにくるのである。結局のところ大学に戻ってくるのだ。

前にも言ったように、コンセプトチャル・スキルには標準的なトレーニングの方法はない。テクニカル・スキルのトレーニングを通じて獲得したハードな知識を使いな

がら、「思考」とか「問題発見」とか「コンセプト作り」ということ試行錯誤でやってみるしかないのである。前に取り上げた「三つのスキル」ということをいったおじさんも「周りが用意できることといえば、結局のところよいコーチをつけるということに尽きる」といっている。しかし、一橋大学が世界に誇りうるゼミナールの仕組みは実のところきわめて優れたコンセプトチャル・スキルのトレーニングの場となっているといえる。僕らはある意味で当たり前のように思っているけれども、欧米の大学の人と話していて一橋のゼミナール制度の話が出ると、そいつはすばらしい！と感心されてしまう。ゼミでコーチ役である担当教官や友達とじっくりと議論したり考えたりすることは、知的スキルをコンセプトチャル・スキルのレベルへと引き上げる格好のトレーニングなのだ。

この意味でもっとも重要なのが卒業論文の作成だ。卒業論はコンセプトチャル・スキルのトレーニングとしてきわめて優れている。よい卒業論を書くためにはまさにコンセプトチャル・スキルが決め手になる。テクニカル・スキルは必要条件にしかすぎない。ここで求められているのは人から与えられた問題を解くことでなく、自分ですてき

な問題を設定することなのである。そのためには、思いっきり「生みの苦しみ」を経験しなくてはならない。試行錯誤の固まりであろう。しかし、ベースとなる知的スキルを備えた人が卒論のような質の高い知的活動を経験するうちにコンセプトチャル・スキルが醸成されていくのだ。つまり、コンセプトチャル・スキルをつけるためには何か本質的な知的作業を「集中してやってみる」しかないのである。その成果はもちろん卒業論文として結実するけれども、それ以上に重要なのはその作業を通じてコンセプトチャル・スキルが育まれるということである。

大学での勉強の最終到達点が卒業論文であるということとは理由があることで、大学での勉強がコンセプトチャル・スキルの獲得を究極の目的にしているということを実に物語っている。そして、このような意味で卒業論文の仕事はきわめて貴重な知的トレーニングの機会なのだ。気合いを入れて集中するべきである。卒論を流してしまおうということは、高級料理屋でぶぐちりを食べたの最後の雑炊を食べずに帰ってしまう、ということぐらいいもったいないことだ。これが一番おいしいのである。ゆめゆめおろそかにしてはならない。繰り返しいうが、

こういう知的トレーニングの場は大学以外には世の中どこを探してもあまりないのである。みんなは自分たちがこういう貴重な場所にいるんだということをよく自覚してほしい。

はじめに知的スキルはみんなにとって役に立つということを強調した。人によって差はあると思うけれども、「役に立つ」という意味でもコンセプトチャル・スキルが重要である。一見すると具体的な問題解決能力であるテクニカル・スキルの方が社会人として有用そうに見えるかもしれない。もちろん自分の専門分野でつけたテクニカル・スキルは社会で仕事をするときにも役に立つ。会計とか法律とかの職業との対応関係が制度化されている分野でなくても、みんなの想像以上に役に立つはずである。しかし、だからといって将来の仕事との関係に神経質になる必要はまったくない。すでに話したように、大学、しかも学部レベルでのテクニカル・スキルのトレーニングはそれ自体がゴールなのではなくて、あくまでもその先にあるコンセプトチャル・スキルの獲得をめざしているからである。

一連の知的トレーニングを通じて何らかのコンセプト

ナル・スキルをつけることができたかどうかが社会でみんなに問われるポイントなのだ。コンセプトチャル・スキルは汎用的な「もの見方」とか「思考のセンス」であるから、ある意味でオールマイティーな知的能力であり、仕事や職業に関わりなくかならず将来生きてくる知的基盤になるのである。逆説的に聞こえるかもしれないけれども、「基盤」があつてその上により高級で特殊な「専門」があるのではない。特定の専門で力をつけた上に一般性の高い知的基盤ができるのである。逆にいえば、こういう知的基盤としてのコンセプトチャル・スキルがゼロであつたら、どんな仕事をしたとしてもそれは深刻なハンディキャップになるだろう。

ここまで話しても、大学での知的トレーニングが本当にそんなにいいものなのかどうか、その入り口か途上にいるみんなは半信半疑かもしれない。僕の限られた経験からいっても、しかし、社会人のみなさんと話をしてみると「もう一度大学時代に戻りたい」という言葉がかならずといていいほど出る。なにも仕事が大変だから、大学に戻ってのんびりと遊びたいといっているのではない。「大学でもっと突き詰めて勉強しておけばよかった」

という反省というか後悔なのである。卒業してからあらためて大学での知的トレーニングの意義を痛感しているのだ。もっとも知的スキルの研鑽には終わりがないので、どんなに本質的な勉強をした人でも、その重要性を知る人であれば多かれ少なかれかならず自分の大学時代を後悔するものである。だからこういう後悔には二つの種類がある。ただの後悔と何らかの達成感や満足感を含んだ後悔だ。達成感をもってにっこり笑いながら後悔できるような人になつてもらいたい。これが僕の希望である。

大学は知的トレーニングの絶好の機会を提供している。据え膳食わぬは大学生の恥である。一年生のみなさん、君たちの大学生活は明るい。二年生、自分の軸足に自覚めよう。三年生、本番はこれからである。四年生、今からでも遅くはない。五年生以上の人、終わりよければすべてよしだ。知的スキルのトレーニングは自分の中に埋もれている能力を発見していくプロセスであり、一生の財産になる知的基盤を獲得するプロセスである。明るく楽しくのめりこめますよ。

(1) ここで書いたような僕の考え方は河合塾という予備校

が出している雑誌『Guideline』で主として高校生・受験生向けに何回か話したことがあるので、興味ある人は参照してください(一九九四年七・八月号、九月号、一〇月号)。ところで、河合塾の中で心ある人たちは最近偏差値以外の大学評価の基準を受験生にもたせようとさまざまな努力をしている。これはとてもよいことだと思ふ。それから最近出た『創造するミドル』(金井壽宏・米倉誠一郎・沼上幹編、有斐閣、一九九四年)という本の中で、本学の沼上先生(非常にディープな人です)が「大学時代」の意

義について本質的なことを語りまくっている。これはお薦めである。

(2) この「三つのスキル」という有名な話をしている論文は一九五五年に書かれた古いものだけれども、その再録版は図書館で手に入りやすい。こちらで読んでみるとよいだろう。

Katz, Robert L., "Skills of an effective administrator."

Harvard Business Review, September-October, 1974.

(一橋大学専任講師)